

内田 伸子 (Uchida Nobuko) お茶の水女子大学副学長

学術博士。第20期日本学術会議会員。お茶の水女子大学理事・副学長。専門分野は発達心理学・認知心理学。

1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1970年同大大学院人文科学研究科修了、学術博士、1970年一橋大学社会学部助手、1976年お茶の水女子大学文教育学部専任講師、助教授(1980)、教授(1990)を経て1998年同大大学院人間文化研究科教授。2004年より文教育学部長、2005年より現職。日本発達心理学会常任理事、日本教育心理学会常任理事など。

主要著書に『子どもの文章：書くこと考えること』(東京大学出版会, 1990)、『まごころの保育—堀合文子のことばと実践に学ぶ—』(小学館, 1990)、『発達心理学：ことばの獲得と教育』(岩波書店, 1999)、『異文化に暮らす子どもたち』(監修著, 2004)、『心理学—こころの不思議を解き明かす—』(光生館, 2005)、『わかりやすい乳幼児心理学』(ミネルヴァ書房, 編著, 2008) (サイエンス社, 2008)、『子育てに「もう遅い」はありません』(成美堂出版, 2008)、『幼児心理学への招待—子どもの世界づくり』ほか多数。

受賞歴：城戸奨励賞(日本教育心理学会, 1978)、読書科学研究奨励賞(日本読書学会, 1980)、読書科学賞(日本読書学会, 2000)、磁気共鳴医学会優秀論文賞(日本磁気共鳴医学会, 2006)。

子どものウソは「嘘」か？

子どものウソは本当に「嘘」なのだろうか？子どもは他人をだますことができるのであろうか？ウソはいつから「嘘」になるのか？これまで正面からこの問題を取り上げた研究はない。本稿では、嘘やだましの発達について、嘘やだましの基底にある認知のメカニズムから考察し、これらの問いに答えたい。想起過程で起こる歪曲や加工作用が、いわゆる「嘘」をもたらす原因であり、情報処理のリソース(注意のスパン)が、意図的な「嘘」や「だまし」の産出を支えていることを見ていく。注意のスパンの小さな幼児期中期頃までは、相手の視点に立って相手の意図を推測することは難しいこと、従って、子どもが相手の意図を裏切ってだましたり、自分の身を守るために相手の目を欺いて嘘をついたりするわけではないことを論考する。論考の帰結は、“子どものウソは大人が「嘘」にしてしまう”のである。幼児期の認知発達と想起のメカニズムに基づき、現実と虚構の区別や、ウソとは知らずに想起の誤りから嘘を方略的に使って相手を騙す段階までの発達過程について、実験研究や観察研究によって検証する。

第1に、嘘とだましは記憶の歪みによって生ずること。第2に、記憶を歪ませる会話のからくりはどのようなものかを探る。第3に、会話や語りの過程に現実とは異なる虚構性、即ちウソが含まれてしまうからくりについて論考を進め、子どものウソは「嘘」ではないことを結論として導き出す。ウソを嘘に変えるのは大人たちの「しわざ」である。大人が想起のからくりを知らず、会話に潜むウソ出現のからくりを知らず、自分の基準で子どもを見てしまう。子どもの心身の発達の視点に立ったかかわりをしないことから、子どものウソは「嘘」になるのである。誰しもわが子が嘘つきや他人をだまして自分勝手な欲求を満たそうとするのは我慢ならないに違いない。しかし、その我慢ならない行為に走らせるのは大人自身なのだ。

幼い頃から、身近な大人たちによって、「嘘ついた」となじられ、「だましたな」と非難されてきた子どもは、幼児期の終わりには、戦略的に「嘘」をつき、他人を意図的に「だます」ようになるのである。乳幼児期、とくに自我が芽生える2歳代から、親に認められ、承認され、何よりも愛されて育った子どもは、決して嘘をつかないし他人をだましたりしない。ウソが嘘に転化するのは身近な大人の誤解と悪意に満ちた、子どもへのことばかけと態度なのである。